

さんしよつ子

安房直子・作 いもとようこ・絵



さんしよつ子

安房直子・作　いもとようこ・絵



さんしよつ子は、さんしよの木の中に住んでいるのです。
そまつな緑の着物を着て、はだしで、髪の毛なんかぼさぼさでしたが、なかなかかわいい女の子なのです。
そのさんしよの木は、まずしいおひやくしよの、畑のまん中にはえています。
「こんな木、じゃまっけだから切ってしまうおうか」と、おひやくしよはいいました。
「そうだね、この木がなくなったら、少しはよぶんに野菜が植えられるもの」と、おかみさんが答えました。



「でも母ちゃん、そうしたら、もう木の芽あえは食べられないよ」
そういったのは、すずなどいこの家のむすめでした。
「そうそう」と、おかみさんはうなずきました。
「あれは、ほんとにおいしいものね」
そうなのです。

さんしよの若葉は、春のお料理にとてもよいかおりをつけてくれるのです。けれど本当のところ、すずなは、そんなお料理が食べたくていったものではありません。
木を切ってしまったら、さんしよつ子が死んでしまうと思っただけでした。

さんしようの木の下には、クローバーが小さなじゅうたんを広げていました。そこは、いつもすすなの遊び場でした。すすなは、そこにほつれたむしろをしいて、あきびんだの、かんからだの、欠けたお皿だのをならべて、ままごとをしました。

遊び相手は茶店の三太郎でした。この男の子はいつでも喜んで、すすなのお客になりましたし、ときには「お父さん」になって、「一日遊んでいくこともあるのです。

さんしようの若葉は、白いお皿の上で美しいお魚になったり、

かおりのよい緑のごはんになったりしました。

「でもねえ、もうちよつとちがうおかずはないかしら。

いつでも葉っぱばかりじゃ、つまらないもの」



ある日、すすなは、おかっぱをゆすつて

そんなことをいいました。それから三太郎の耳に口をつけて、そつとささやきました。

「ね、ほうれんそう、使おうか」

ふたりのまわりは、ほうれんそう畑だったので。三太郎は目をきよろつと動かしませんでした。

すぐそばに、こい緑色をした、ぎざぎざの葉が風にゆれていました。あれを「まいきざんで、たんぼぼのたまご焼きにそえたら、なかなかしゃれたおかずができそうです。三太郎は、こくつとうなずきました。

「じゃあ、「本引っこぬいてよ」

すすなは、三太郎をつつきました。

「でも……父ちゃんに、おこられないかい」

「だいじょうぶ。いま、むこうむいてるもの」

すすなの父さんは、少しはなれたところに、むこうむきで仕事をしていました。





「早く、早く」と、すずなはせきました。

そこで三太郎は手をのぼして、えいっと一本ぬきました。思いがけず、大きなひとかぶでした。すずながそれを受けとって、小さなまな板のそばに置いたとき「ころー」と、びっくりするほど大きな声がしました。

すずなの父さんが、ふりむいてこわい顔をしていました。

「にげろっ」と、三太郎はいいました。

ふたりは、ぼっと立ちあがると、まるでうさぎのように、かけだしました。

ほそいあぜ道を一列になって、ばたばたと走りつづけ、やがてバス停のすぐまえにある小さな茶店にかけこみました。そこでは、たすきをかけた三太郎の母さんが、せっせとおだんごをこしらえているのです。

「うわーい」

「うわーい」

みょうなさけび声をあげて、ふたりは茶店のいすにすわると、せいせい息をしながら、できたてのあまいおだんごにありつくのでした。



さて、ふたりのうしろすがたを見送ったすずなの父さんが「やれやれ」と、また仕事にかかろうとしたときです。もうだあれもないはずの、さんしょうの木の^き下^{した}で、カサリと音がしました。

ひょっとふりむくと、これはまあ、さんしょう子がひとり、むしろの上^{うへ}にちんまりすわって、ほうれんそうの赤い根^ねっこをきざんでいるのです。

「ありゃ」

すずなの父^{ちち}さんは、目^めをぼちぼちさせました。

「おまえ、だれだ」

すると、さんしょう子はこちらをむいて、ペろりと赤^{あか}い^いた^たを出^だしました。



さんしよっ子は、お手玉が好きでした。それで、すずなが
お手玉をするときは、いつでも木の上から見えていました。

ひとりでさびし ふたりでまいりましょう

見わたすかぎり よめ菜にたんぼ

妹の好きな むらさきすみれ

菜の花さいた やさしいちようちよ

九つ米屋 十までまねく

すずなは、くりかえしくりかえし歌います。たった五つの
お手玉は、すずなの小さな両手にあやつられると、まるで十も
二十もあるように見えるのです。それがさんしよっ子には、
おもしろくてたまりませんでした。すずなは、まるいほおを、
日にふくらませて、お手玉を落とすまいとむちゅうでした。

ひとりでさびし ふたりでまいりましょう

見わたすかぎり よめ菜にたんぼ

と、風もふかないのに、すずなのお手玉が、急にばらばらと
くずれおちました。そして、むしろの上にはちらばったお手玉は、
四つしかありません。なんと数えなおしても、たしかに
ひとつ足りないのです。すずなは、あたりを見まわしました。
「木にひっかかったのかな」と、さんしよの木を見あげましたが、
そこには小さな若葉が、すずしげに光っているだけでした。

こんなことが何回もありました。

「しよのない子だね、いくら作ってやってもなくすんだから」

母さんはぶつぶついいながら、それでもまた新しいのを作って

くれました。お手玉は、いろんな小ぎれをはぎあわせた中に、

ひとにぎりのあずきを入れて作るのです。

「これから、だいじにするんだよ」

そういわれるたびに、すずなはすっかりしよげかえって、

考えこんでしまうのです。

(どうして、なくなるんだらう)

それがさんしよのせいだなんて、ゆめにも思いは

しませんでした。



夕ぐれ。

だあれもない、ほうれんそう畑のまん中に、さんしよつ子はすわっていました。赤い夕日をあびて、色とりどりのお手玉がおどっています。

ひとりできびし ふたりでまいりましょう

見わたすかぎり よめ菜にたんぼ

妹の好きな むらさきすみれ

菜の花さいた やさしいちようちよ

九つ米屋 十までまねく

それは、すずなの歌声によくにっていました。お手玉をあやつる手つきも、すずなどそっくりでした。

さんしよつ子が、毎日ひとつずつくすねたお手玉は、ただか二十だかありました。それをさんしよつ子は、ひみつの場所にだいじにかくしておきました。



ある日、さんしよっ子は三太郎の茶店にやってきました。
細長い木のいすにこしかけて「おだんご、ひと皿、くださいな」と
よびました。

それは、なんだかすずなの声ににっていましたから、おくで
あずきをにいたおかみさんは、三太郎にいました。

「すずなちゃんが、おだんご食べにきたよ。おまえ、持つていつて
おやり」

「へ、ほんとかい」

三太郎は、おどりがりました。それから、おだんごをたっぷり
お皿にのせて、いそいそと店へ出ていきました。

「いらっしやーい」

にこにこ笑ってふいと顔をあげると、そこにはまあ、緑の着物を
着たちっちゃい女の子が、すましこんですわっていたのです。

「だれだあ、おまえ」

あきれて三太郎は聞きました。すると、さんしよっ子は、

おじぎをひとつしました。そこで三太郎は思いました。

（ははあ、これはとなり村の子どもだな。きつとバスできたんだ。
母さんが用たしにいつてるあいだ、ここで待たされてるんだ。

そんなこと、よくあるもんか）

三太郎はにこつと笑って、お皿をていねいに女の子のまえに
置きました。

すると、さんしよっ子は、またおじぎをして、おいしそうに
食べはじめました。

けれども、三太郎がほんのちよつと目をなしたすきに、この
ふしぎなお客は、店から消えていたのです。きれいにたいらげ
られたお皿の上には、緑の小さい木の葉がこぼれていました。

つぎの日、三太郎は、すずなにこの話をしました。

「ああ、それはきつと、さんしよっ子よ」と、すずなはいました。

「さんしよっ子は、ときどき、そういういたずらをするんだって。

さんたろうちゃん、食いにげされたんだね。あははっ」

すずなは、そっくりかえって笑いました。三太郎は少し気を

悪くしました。

「そんなこといつて、すずなちゃんは、さんしよっ子を見たこと

あるんかい」

「……………」

すずなは、首をふりました。

「ほーらみな。見たこともなくて、わかるもんか」

「それでも、さんしよっ子は緑の着物、着てるつていうもの」

「ははっ、それはうそだよ。さんしよっ子は、緑色のもやなんだ。
人間のかっこうなんかしてるもんか」

長いこと、ふたりはそんな話をしました。

